ネワール族の住まいをつくりだす空間概念の連続性と変化

— ネパール・カトマンドゥ盆地のキルティプールの場合 —

TRADITION AND CHANGES ON SPATIAL CONCEPTS WHICH HAS CREATED
DWELLING HOUSES OF NEWAR PEOPLE

— A case study on Kirtipur in Kathmandu valley, Nepal —

谷内 麻里子*, 塩谷 壽翁**

Mariko TANIUCHI and Toshio SHIOTANI

The purpose of this study is to analyze spatial order of the dwelling houses of Newar people that resides in Kathmandu valley in Nepal and the change. This paper compares the result of the fieldwork in Kirtipur with the result of obtaining in the Khokana village and the Bungmati village.

The spatial composition that has been traditionally succeeded to the dwelling houses of Newar people is being almost kept now. Moreover, people's behavior in the dwelling houses has not changed basically.

People's behavior based on the conception of pure and impure in a religious act have changed.

Keywords : dwelling culture, way of life, behavioral patterns, sense of space, pure and impure

住文化, 生活様式, 行動のしかた, 空間感覚, 浄と不浄

1 研究の経緯と本稿の目的

近年にネパールのカトマンドゥ盆地に居住するネワール族^{注1)}の住まいの空間的な秩序、すなわち住まいの空間的な構成をつくりだす枠組みの追究が続いている。本稿は、その一環をなすものである。

筆者らは、カトマンドゥ盆地の複数の集落でフィールドワークを続けている。これらのフィールドワークは、住まいの空間概念を、浄と不浄の観念^{注2)}に関係する人びとの行動および空間認識に関心を寄せてとらえようとするものである。

前稿^{1) 2)}では、①日常的な住生活、住まいでおこなわれる神札拝、食事、炊事調理などの宗教的行為^{注3)}、月経、ジャートの存在における浄と不浄の観念に着目し、また②産育の儀礼、葬送の儀礼および年中におこなわれる祝祭行事の一部を取りあげて、人びとの行動および空間認識のしかたから空間概念を読み取り、住まいの空間的な秩序を事例的に説明した。前稿に続いて、本稿では、ネワール族の住まいおよび住生活の継承とその展開を説明し、空間的な秩序の連続性とその展開の傾向を推測する。

2 本稿の内容・方法

筆者らは、2006年9月に、カトマンドゥ盆地南西部のキルティプール(図1)の中心部に位置するラクおよびその周辺地区(図2)で、ネワール族の住まいを調査している(以下、キルティプール調査^{注4)})。キルティプールには、ネワール、ブラーマン、チェトリ、サルキなどのチベット・ビルマ・モンゴル系の民族およびインド・アリア系の民族が混住している。ラクには、虎の神バーガ・バイラヴを祀る寺や旧王宮があり、おもにジャブと総称される農民のジ

ヤート、マハルジャンなどが住む。キルティプール調査では、複数にわたるジャート、マハルジャン、タンドウカール、プラダン、コパリの住まいを調査した(以下、キルティプール調査住居^{注5)})。調査住居は現地の住民との交渉を経て選んだものであり、得られた結果は調査住居を選定する上での制約を含んだものである。

本稿の記述は、キルティプール調査住居の共時的な比較と複数のムラ^{注6)}からの聞き取りで得られた資料をもとにしている。また、さらに本稿では、すでにカトマンドゥ盆地周辺部の集落コカナおよびブンガマティでおこなったネワール族の住まいの調査(以下、コカナ調査、ブンガマティ調査^{注7)})の結果を参照し、キルティプール調査住居と比較する。前稿では、両者の住まい(以下、コカナ調査住居、ブンガマティ調査住居)には、継承されてきたネワール族の住まいの空間的構成と住生活が保たれていることを事例的に確かめている。

本稿の内容は、調査上の制約から、少数事例の比較分析に留まるものであるが、これまでにおこなってきた一連の研究³⁾と併せて、ネワール族の住まいの空間的な秩序を説明する研究に資することができるのではないか、と筆者らは考えている。

本稿の内容は、次のようである。

(a) 継承されてきたネワール族の住まいの空間的な構成がどのように展開しているのかを説明する。

(b) 日常生活における人びとの行動と空間認識が、住まいの空間的な構成の展開とどのように関係しているのかをとらえ、空間概念とその展開の傾向を見いだす。

(c) ①炊事調理・食事および住まいの神札拝などの宗教的行為、②月経およびジャートの存在、に関係する浄と不浄の観念のもとで

* 日本学術振興会特別研究員 博士(学術)

** 美作大学大学院生活科学研究科 教授・学博

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science, Ph. D.
Prof., Dept. of Human Life Science, Graduate School of Human Life Science, Mimasaka Univ., Ph. D.

図1 調査をおこなった
キルティプール

図2 選んだ地区：キルティプールの中心部に位置するのラクおよび周辺地区

の空間概念が、どのように変わりつつあるのかを、一部に推測を加えてとらえる。

3 継承されてきたネワール族の住まいの空間的構成とその展開

ネワール族に継承されてきた住まいの空間的な構成は、前稿で説明している。ここでは本稿の理解のために、それを以下に要約する。

(a) これまでに保たれ継承されてきたネワール族の住まいは、コナ調査住居およびブンガマティ調査住居を参照すれば、上の階から順にバイガ、チョト、マトア、チュリと称される4層の階が重なるものである(一部は5層、本稿では、この形態の住まいを積み床と呼ぶ)。

(b) 最上階のバイガは炊事調理および食事の場である。バイガにはブトゥ(土でできた竈)が置かれる。

(c) バイガの下階チョトは、家族がくつろぎ、親族などの外来者を応対する場である。またチョトは、バイガとともに非日常におこなわれる儀礼や祝祭行事の場でもある。さらにチョトは収穫物の置き場でもある。

(d) マトアおよびチュリには就寝の場となる部屋コタがあり、マトアには住まいの神々を祀り一家の財産を保管するドゥクウ・コタがある。ジャートによっては、神仏は最上階に祀られる。

(e) おもに農民のジャートが住むコナ調査住居およびブンガマティ調査住居で、地上階チュリは、農機具が置かれ、牛、水牛、山羊などが飼われる場であり、ブンガマティ調査住居の一部、シャキヤの住まいのチュリは、彫刻などの仕事場である。

以上の継承されてきた空間的な構成は、キルティプール調査住居(図3、図4)のほとんど(12戸のうち9戸、75.0%)で保たれている。しかしながら、一部の住まいには、以下のような不連続な展開が認められる。

(a) 居住面^{注8)}を拡大する建築更新は徐々にすすんでいる(表1、表2)。それは、①屋敷地の背後に既存の居住面に連続するように増築する(表1の住居4, 8)、②隣接する屋敷地に別棟を新築する(表1の住居1)、③既存の最上階の上に階を増やす(表1の住居11, 12)、などの更新である。居住面の拡大によって増えた部屋コタは、概括的には、就寝および炊事調理の場となる(表2の住居4, 8, 11, 12)。

(b) コナ調査住居およびブンガマティ調査住居では、同居する家族が多く部屋が少ない場合に、神々を祀る部屋ドゥクウ・コタで就寝する例がみられるが、キルティプール調査住居の一部(表1の住居3, 10)では、既存のドゥクウ・コタを改築して、就寝の場や炊事調理の場に転換している。

(c) 日常的にも非日常的にも先祖の崇拜および神々の信仰に関係する行動の場となるバイガの更新がすすんでいる。具体的には、バイガの階高を高くする改築であり、既存の傾斜屋根を陸屋根にして、屋上に穀物などの乾燥の場となる露台コーシをもうける改築

がおこなわれている(表1の住居4, 7, 8)。

(d) バイガの炊事調理の場は、キルティプール調査住居のすべてに保たれているが、バイガのほかに炊事調理の場がもうけられる展開が、一部の住まいに現れている(図3の住居4, 7, 8, 10)。それは薪にガス(プロパンガス)、電気などの熱源が加わったことによって可能になった。

バイガでは近年にガスブトゥ(ガスコンロ)、ヒーター(電熱器)、ライスクックル(電気炊飯器)などが導入されている。ほとんどの住まいでは、主にあらたな熱源で炊事調理をおこなうようになり、竈ブトゥは、燃料の入手が困難になったこともあり、日常的には補助的に使われるに留まったり、儀礼および祝祭行事に使われるようになっている。また日常的に竈ブトゥを使う住まいでは、第一世代は竈ブトゥを使い、第二世代はガスおよび電気を熱源として調理するなど、世代の間で炊事調理の仕方は変わってきている。

(e) キルティプール調査住居の一部では、地上階に就寝の場となる部屋コタをもうける更新がすすんでいる(図3の住居1, 4, 5, 8)。この更新は、継承されてきた住まいの空間的な構成からみれば不連続なものである。

表1 調査住居における建築更新

調査住居	1960年代		1970年代		1980年代		1990年代		2000年代	
	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半～
1					○					○●B
2				▲					2↑	
3						○4				
4						○●A△b3				
5							○↑△a6			
6							△a		1△c	
7				↑△b						
8		1		△b●A		7			1	
9				7↑					4	
10				○			↑2,5		4	△a
11		1,2,4,5●C								
12	▲5		●C							

●：居住面の拡大をとまう建築更新 (●A：既存の居住面に連続して屋敷地の背後に増築

●B：隣接する屋敷地に別棟を新築 ●C：既存の最上階の上に階を増築)

▲：住まいを分割(相続などによる)

○：ドゥクウ・コタなどを就寝の場となるコタに改築

△a：ツォービ(便所)を付設 △b：コーシ(露台)を付設

△c：トゥン(窓ぎわの洗い場)を付設

○：屋根を付けかえ、バイガの天井高を高くする改築

↑：屋根を傾斜屋根から陸屋根に変え、コーシをもうける改築

住まいの部位の改築 1：屋根、2：内壁、3：柱、4：階段、5：窓、6：床、7：その他

図3 調査住居 (地下階: クエチェリは略す)

図4 住まいの実例

左: マハルジャンの住まい (調査住居 11)
 右: プラダンの住まい (調査住居 4)
 (いずれも地下階: クエチェリは略す)

キルティプールに居住するドミナントなジャート、マハルジャン、タンドゥカールは、ジャブと総称され、もとは農業を生業としていたが、現在は農外収入によって生計を立てており^{注9)}、一部の住まいのチェリで家禽などの家畜が飼われるにとどまっている。主たる生業の転換は、チェリに部屋コタをもうける展開と結びついている。

(f) 継承されてきたネワール族の住まいでは、就寝の場となる部屋コタは、おもにチョトおよびマトアにもうけられている。この傾向は、キルティプール調査住居における建築更新がおこなわれ居住面が拡大される住まいでも保たれている。しかしながら、特徴的なのは、炊事調理の場をコタの内部にもうけたり、コタとは分けて近くにもうける住まいが現れていることである。

(g) 継承されてきた住まいでは、二階以上の階、バイガア、チョト、マトアの床面、マトア以上の階を結ぶ階段には、シューツァ・ソ (雌牛サソの糞ゴパールと赤土シューツァを混ぜたもの) が塗り籠められている。シューツァ・ソは、日常非日常の多くの生活場面で、住まいを浄な状態 (汚れていない状態) に保つために塗り籠められるも

のである。

キルティプール調査住居のうち、地上階チェリに部屋コタをもうける住まい(表2の住居1,5,8)では、比較的若い世代の生活領域となる一部のコタを除いて、シューツァ・ソは、チェリにもうけられたコタにも塗り籠められている。さらに、これまでに保たれてきたマトアから上階での裸足の行動領域は、地上階にもうけられた部屋に拡がっている。浄な状態に保たれた二階以上の階と地上階チェリを分ける空間概念は、チェリの部屋コタを含んだ二階以上の階とコタ以外のチェリの部分を分けるように展開している。

4 日常的な人びとの行動および空間認識の展開

キルティプール調査住居における日常的な人びとの行動のしかたは、コカナ調査住居およびブンガマティ調査住居に比較して、著しく違っているわけではない。しかし、これまでに保たれてきた行動とは不連続な行動のしかたが一部の住居に認められる。ここでは、日常的に住まいでおこなわれる行動を、同居する家族のみがおこな

表2 日常生活における行動の場

調査 住居	シ ヤ ー ト	同 家 族 の 人 数	※1 コー ス (露 台)	バイガ ア (5階)	バイガア		チョト				マトア				チェリ		ク エ ・ チェリ (地下階)	
					バイガア	コタなど	チョト※2	コタなど			※2 マトア	コタなど			チェリ	コタなど		
1	マ	7	②	-	▲△デ K1,K2,K3,K4,K5 食(全) 応	-	応		-	-	応	△45 応			応	○88,○55 応	-	-
2	タ	9	①②	-	▲ K1,K2,K3,K4,K5 食(全) 応		応	○63,○11,○6	△16		D	-	-	-	D	水(手)		-
3	タ	5	②	-	▲△デ K1,K2,K3,K4,K5 食(全) 応	-	△54=○51, ○9 応	-	-	-		△24,△19	-	-	ト	-	-	-
4	ブ	17	K5	①	▲△ガ K1,K2,K3,K4 食▲90=●75 応	-		食▲36=●35, ▲11,●8 △36=○35, △11,○8	△90=○75 応	△ガ 炊▲36=●35		△デ 食炊▲40,▲20, ●17 △40,△20,○17	△ガ 食炊▲30=●26, ●7 △30=○26,○7		ト	食▲33=●30, ●14,▲10 △33=○30, ○14,△10	△ガ 炊▲33=●30	
5	マ	8	①② K5	-	▲△ガ K1,K2,K3,K4 食(全) 応	P	○80 応	-	-	-	応	○21,○15,○13, ○11	○17		D	水(ホ)	△54=○48	
6	ブ	4	②	-	▲△ガ K1,K2,K3,K4,K5 食(全) 応	-		○67,○28 応	△25,△23 応						D	水(手)		
7	マ	9	②	-	▲△ガ K1,K2,K3,K4 食●72,▲40, ▲32=●32,●4 応	D	○72 応	△32=○32	-	-	応	食▲38=●38, ▲16,●8 △16,○8	△40	△ガ 炊▲38=●38 △38=○38	ト 水(ホ)			-
8	コ	7	K5	①	▲△デ K1,K2,K3,K4 食▲69=●64, ▲14 応	-	-	-	-	-	応	△69=○64 応	△14	△22	ト 水(手)	食▲41=●40, ▲10,▲19 ○40	△ガ 炊▲41=●40	
9	マ	12	K5	②	▲△ガ K1,K2,K3,K4 食(全) 応	-		△32=○25 応	△18	△25	応	○38,○14	○42		D			-
10	マ	9	K5	②	▲△ガ K1,K2,K3,K4 食●70, ▲38=●32,●0 応	-	○70,○22 応	△38=○32, ○0 応	-	-	応	△デ 食炊▲45=●43, ▲20,▲18,●22 △45=○43	-	-	ト 水(手)			-
11	マ	6	K5	②	▲△ガ K1,K2,K3,K4,K5 食(全) 応		△80=○79, ○17,△13 応	-	-	-	応	△40=○38		D			-	ト 水(手)
12	マ	5	① K5	▲△デ K1,K2,K3,K4 食▲85=●82 応	△ガ K1,K2,K3, K4 食●43, ●43,▲10 応		△43,○17, △10 応	-	-	-	応	△85=○82			D	水(手)		-

※1 ①: バイガアに隣接するコース(露台)がある ②: 屋上にコースを設けたり、屋根面がコースの代わりに使われている ※2 それぞれの階で通路を兼ねている部分
 プ: プラダン マ: マハルジャン タ: タンドゥカール コ: コバリ ▲: プトゥ(竈) △: プトゥ(竈)以外の炉(△ガ: ガスコンロ、△デ: 電熱器) ト: 便所
 水道の位置および神々に供える浄水二口をバイガアに上げる手段 水(手): 容器に水を入れて手で運んで汲み上げる、水(ホ): ポンプアップで汲み上げる(住居3,4,8,10は外部の水道から水を汲んで上げる。)
 K1~K5: バイガアを中心とする炊事調理の場(K1: 食材を洗う、K2: 食材を加工する(切る、きざむ)、K3: 加熱、K4: 盛り付け・配膳、K5: 食器や調理器具を洗う)
 炊▲n=●n: 炊事調理を分ける時の炊事調理の場(夫婦であらわす)
 食(全): 家族全員そろって食事の場 食▲n=●n: 食事を分ける時の食事の場(▲は男、●は女、=は夫婦、nは年齢、同じ部屋で食事する家族はコマで区切ってしめす)
 ▲n,○n: 就寝の場(▲は男、○は女、=は夫婦、nは年齢、同じ部屋で眠る家族はコマで区切ってしめす)
 応: 外来者(家族と同じジャートおよび上位のジャートの外来者)を応対する場(家族より下位のジャートの応対の場は、本文を参照)
 D: ドゥクウ・コタと呼ばれる部屋 P: プザ・コタと呼ばれる部屋
 各欄の-は該当する部屋が無いことをしめす
 □: 居住面の拡大をとまう建築更新によってできた部屋コタなど

う生活(以下、ウチ向きの生活)と家族に外来者が加わっておこなう生活(以下、ソト向きの生活)に分けて説明する(前出表2、表3)。

4-1 ウチ向きの生活における人びとの行動

ウチ向きの生活における人びとの行動は、具体的には、以下のようである。

(a) 継承されてきた住まいでは、最上階のバイガアはブトゥがある炊事調理および食事の場であり、それぞれの住まいで、炊事調理はバイガアのみでおこなわれ、主要な食事、朝食にあたるジョーナと夕食にあたるベリイは、家族の全員がそろってバイガアでとる。このような炊事調理および食事における人びとの行動は、キルティプール調査住居の多く(12戸のうち7戸、表3型の住居)で認められる。

これに比べ、バイガアでの炊事調理および食事の場を保ちながら、チョト、マトア、チェリの部屋コタに炊事調理および食事の場をもうける住まいが現れている(表2の住居4、7、8、10)。それは、多世代が同居する家族^{注10)}での、世代間を分ける生活領域の形成の現われ、と考えることができる。これらの住まいでは、第一世代の生活集団の炊事調理および食事の場はバイガアであり、一部を除き第二世代および第三世代の炊事調理および食事の場はチョト、マトア、チェリの部屋コタである。後者は、就寝の場となるコタに重なっている。

同居する家族の間で、第一世代と第二世代および第三世代の炊事調理および食事の生活領域を分ける展開が認められる。

(b) 継承されてきた住まいでは、就寝の場は、主としてチョトお

よびマトアの部屋コタである。またコタとしては独立しておらず、上階への通路につながるチョトの部分も就寝の場となる例がある。この傾向は、キルティプール調査住居でも認められる(表2の住居3,5,7,11)。

ネワール族の住まいにおける多人数の家族の就寝時の生活領域は、概してみれば、それぞれの世代の夫婦を中心とする生活集団を分けるように形成される。キルティプール調査住居でも、この就寝形態は保たれていて、主としてチョト、マトアの部屋コタに生活領域が形成されている。留意すべきは、就寝に加えて炊事調理および食事の場を分ける生活領域の形成がおこなわれていることである。

4-2 ソト向きの生活における人びとの行動

ソト向きの生活における人びとの行動は、具体的には、以下のようである。

(a) 日常的に親族および親しい友人などの外来者を応対する行動は、概括的にはチョトの部屋コタ以外の部分でおこなわれる。日常的な外来者の応対にバイガア、マトアおよびチェリのコタが使われることはほとんどない。前稿を参照すれば、チョトは、日常的にも非日常的にも、外来者を迎え入れるソト向きの生活によって意味づけられる場、と考えることができる。このソト向きの生活における行動は、キルティプール調査住居でも違ってない。

(b) 前稿を参照すると、継承されてきたネワール族の住まいは、

表3 炊事調理および食事の場とその型

型	該当する調査住居	同居する家族の炊事調理および食事の場の形態
型1	1, 2, 3, 5, 6, 9, 11	最上階のバイガで炊事調理をおこない、同居する家族の全員が食事をする
型2	12	最上階のバイガで第一世代を含む家族の集団が、それとは別のバイガの部屋で第二世代以下の家族の集団が、それぞれ場で炊事調理と食事をする
型3	4, 10	第一世代を含む家族の集団がバイガで炊事調理および食事をし、第二世代以下の家族の集団が就寝の場となるコタで炊事調理および食事をし、
型4	4, 7, 8	第一世代を含む家族の集団がバイガで炊事調理および食事をし、第二世代以下の家族の集団が就寝の場となるコタで食事、それに隣接する部屋で炊事調理をする

幾重にも重なった内側ドゥネと外側ビネという二元的に対立する空間概念を枠組みにして、つくりだされている。人びとは、常に住まいを浄な状態に保とうとする観念を持ち、内側ドゥネから外側ビネへと汚れを追い出すように行動する。また、ネワール族にとって、住まいは、上階ほど浄な状態に保たなければならないものである。さらに、家族にとって下位のジャートの存在は、浄と不浄の観念と結びついていて、下位のジャートの侵入によって、住まいは不浄な状態になると考えられている。

この観念は、キルティプール調査住居においても、すべての住居に保たれている。これは、継承されてきた住まいに比較して居住面を拡大するような、不連続な空間的構成が現れている住まいでも、変わることはない。

調査をおこなったラクおよびその周辺地区には、社会的に上位下位に位置づけられる多くのジャートが居住している。それぞれのジャートは、概括的にみれば、①ブラーマン（司祭）、グバズ（僧）、シュレスタ、ブラダンなどのグループ、②シャキヤおよびマハルジャン、ツラダルなどのもとは農民のグループ、③タンドウカールなど、②のジャートの下位に位置づけられるグループ、④コバリ、ナビ、ポーなどの③より更に下位に位置づけられるグループ^{注11)}に大別できる。あるジャートからみて、下位のジャートは、④のジャートのグループ（以下、Aグループ）と、④ではないが自分たちの下位に位置づけられるジャートのグループ（以下、Bグループ）の、2つのグループに分かれる。

前二者の上位のジャートの住まいでは、Aグループのジャートは、マトアに上がる階段の上あたりにまでしか侵入を許されない。またBグループのジャートは、最上階のバイガまでの侵入を許されるが、ブトゥに入ることはできない。農民層のジャートの下位に位置づけられるジャートでは、下位のジャートは、最上階のバイガに入ることはできるが、ブトゥに入ることは禁忌である。

以上のキルティプールにおけるジャートの住まいへの侵入に関する記述は、複数のムラ人^{前出、注6)}から聞き取った内容にもとづくものである。キルティプール調査住居12戸においても、同様の資料を個別に収集しているが、内容が不十分であるため、今後に再調査した上でその結果を報告したい。

5 浄と不浄の観念および空間概念の展開

5-1 宗教的行為における浄と不浄の観念に関する空間概念とその展開

(1) 炊事調理・食物授受の場合

ネワール族に継承されてきたのは、住まいでおこなう炊事調理および食事は、宗教的行為であるという観念である。先祖や神々に供える飯は浄な状態にしなければならないし、飯を炊く竈ブトゥのある領域は、浄な状態に保たなければならないとされる。また先祖や神々と共食する食事の場バイガは、常に浄な状態に保たなければならないとされる。

キルティプール調査住居における浄と不浄の観念にもとづく、炊事調理および食事における人びとの行動には、以下のように、継承されてきたものとは不連続な行動が認められる。

(a) 継承されている住まいでは、竈ブトゥおよびその周辺を含む場所はブトゥと呼ばれ、可視的に区切るものはないが、人びとによって一つの領域（以下、ブトゥの領域）と認識されている。

コカナ調査住居およびブンガマティ調査住居では、炊事調理は、ブトゥの領域を浄な浄性のレベルに保っておこなわれるものであり、炊事調理が始まると、炊事調理をする女性^{注12)}（以下、主婦）以外の者はブトゥの領域に入ることはできない。前稿では、継承されてきたネワール族の住まいにおいて、①人は日常には、浄でも不浄でもない中間の浄性のレベルにあるが、宗教的行為は、浄化の儀礼によって人の浄性を中間のレベルから浄なレベルに移行しておこなわれる、また②宗教的行為は、行為をおこなう場を浄化の儀礼によって清め浄な状態にしておこなわれる、ことを説明している。

炊事をする主婦は、朝一番に顔を洗うことによって、観念的に中間の浄性のレベルから浄な浄性のレベルへ移行すると考えられている。またブトゥの領域の浄性は、炊事調理を始めると浄な状態に移行する。このように炊事調理時に人と場の浄性のレベルが浄に保たれるブトゥの領域に、中間および不浄な浄性のレベルの者が入ることは禁忌であり、これを侵すと、ブトゥの領域は汚れて、不浄な状態になると考えられている。しかしながらキルティプール調査住居

図5 食物授受・月経における浄と不浄の観念に関する空間概念（最上階のバイガ）

では、同居する家族であれば、炊事調理時のブトゥの領域への侵入に禁忌はない。また竈ブトゥに触れることも禁じられていない。

(b) ネット族は、炊事調理の場を下位のジャートから遠ざけ隔離する観念を持っている。コカナ調査住居およびブンガマティ調査住居を参照すると、継承されている住まいでは、炊事調理をおこなっている場合、最上階バイガアに下位のジャートは侵入を許されない。これは、キルティプール調査住居でも概括的には違っていない。この禁忌が破られてバイガアが汚れると、バイガアの床および竈ブトゥにシューチャ・ソを塗って清めなければならない。また作った食べ物は、すべて捨て、鍋などの調理器具は水で洗い清めなければならない。また下位のジャートが水瓶に触れていたら、水を汲みかえなければならないとされる。

このような観念は、キルティプール調査住居の居住面を拡げる更新をおこなっている住まいでは、幾分違ってきている。バイガアの床をコンクリートに変えている住まいでは、下位のジャートの侵入によってバイガアが不浄な状態になっても、床を水で拭くに留まる。

(c) 食事を始めると、食べている者の浄性は、唾液のついたティボという不浄な浄性のレベルになる。このネット族に継承されているティボをめぐる観念と人びとの行動は、キルティプール調査住居にも保たれている。

ティボになった者は、ブトゥの領域に入ってはならない。先祖や神々に供える飯が汚れてしまうと考えられているからである。この禁忌を破ると、ブトゥの領域およびバイガアの全体は汚れたことになり、バイガアの床とブトゥにシューチャ・ソを塗り籠めて清めなければならないことになる。また食器および調理器具は水で洗って清める。この場合、家族はつくった食べ物を食べるが、先祖や神々に供えることはない。

キルティプール調査住居では、竈ブトゥの他に電気およびプロパンガスを熱源とする炉が導入されており、ティボをめぐる観念と行動のしかたは、おもに使う炉によって違っている。バイガアへのこれらの炉の導入は、食事におけるティボをめぐる観念と関係している。それは以下のようなものである。

①炊事調理に竈ブトゥのみを使う住まいはキルティプール調査住居では少数に留まる(図5の住居2)。これらの住まいでは、食事でティボになった者がブトゥの領域に入ることによってバイガアの全体が汚れるとされる継承されてきた行動のしかたが保たれている。

②床面に置いたガスコンロなどを主につかい、竈ブトゥを併用する住まい(図5の住居1, 3, 4, 6, 7, 12)では、ブトゥの領域は、竈ブトゥに留まらず、ガスコンロなどが置かれる位置の周辺を含んだ場にまで広がっている。このような住まいでは、広がったブトゥの領域にティボになった者が入ると、バイガアの全体が汚れると考えられている。

③竈ブトゥをほとんど使わずに、床面から高い位置に置くガスコンロなどを主に使う住まい(図5の住居5, 9, 10, 11)では、ブトゥの領域の認識のしかたは多様である。しかし共通しているのは、ティボになった者がブトゥの領域に入っただけでは、汚れたことにはならず、炉に触れるとバイガアの全体が汚れるとみなされる、ことである。さらに炊飯器は飯を炊く竈ブトゥと同じように考えられており、ティボになった者は触れてはならないとされる。いっぽう、チョト、マトア、チェリの部屋コタにもうけられる炊

事調理の場では、バイガアほどには厳密ではないが、食事を始めてティボになった者が炉に触れると、炉とその周辺の領域は汚れると考えられている。人びとは、これらの部屋でも炉の周辺を一つの領域と認識している。

(d) ネット族にとって食事は、先祖や神々と共食するものであり、宗教的行為である。先祖との共食とは、一家の最年長者タカリ(男のタカリ; ナヨ)が食事に先立っておこなうボウビーグのことである。ナヨはボウビーツァという台に三代前に遡る先祖の数だけの飯とダルスープ(豆のスープ)を盛り、浄な水をかけ清めて供える。また、神々との共食とは、食事の場面に同席する家族の全員が、食事に先立ち床に飯を盛って供えるデュオツァエグのことである。

先祖との共食ボウビーグは、ナヨの食事の場となる最上階のバイガアでおこなわれる。キルティプール調査住居に現れている、食事の場をバイガアのほかにチョト、マトア、チェリの部屋コタにもうける住まいでは、先祖との共食ボウビーグは、最上階のバイガアでのみおこなわれる。また神々との共食デュオツァエグは、バイガアでもバイガア以外の食事の場でもおこなわれる。食事を宗教的行為とする観念とそれにもとづく人びとの行動は、受け継がれている。

(2) 住まいの神礼拝の場合

ネット族にとって、住まいの神礼拝は、炊事調理および食事とならば宗教的行為である。住まいの神礼拝は、朝に住まいを浄な状態にした後に、主婦がおこなう。

キルティプール調査住居における住まいの神々の信仰は、継承され保たれてきたものと大きく違っていない。しかし、一部の住まいに、変化を推測できるような展開が認められる。それは、以下のようである。

(a) コカナ調査住居およびブンガマティ調査住居では、主婦は毎日、朝一番に、主要な出入口ムールカとその前にある神クマルが宿るとされる石ピカルキを掃き清めるボンブイグをおこない、つづいて住まいの内部を掃き清めると、ムールカにシューチャ・ソを塗り籠めるルッカ・ボンイリグをする。その後に、住まいの水道が近隣の水場で、顔を洗い清めるクアシリグをして、自らを浄なレベルにすると、バイガアに浄な水を汲み上げる。

水汲みは、住まいを浄な状態にし、主婦自身を清めて浄な浄性のレベルにしてからでないと行えない。このような一連の行動の後に汲み上げた水は浄な水ニーロウと呼ばれ、先祖や神々に供える飯の炊飯に使うことができる。炊事調理に使う水は、一夜を越すと汚れてしまい先祖や神々に供える炊飯には使えない、と考えられている。

キルティプール調査住居では、12戸のうち8戸(前出表2)に1990年代の後半から水道が導入されている。しかしながら、水道の水を最上階バイガアにポンプアップする住まいは少数(表2の住居5, 7)であり、ほとんどの住まいでは、チェリの水道および近隣の水場から水を汲み、バイガアに運び上げている。バイガアにポンプアップしている住まいでも、水を汲み上げるのは、朝の一連の主婦の行動の後であり、浄な水ニーロウで先祖や神々に供える炊飯をするという観念は継承されている。

(b) コカナ調査住居およびブンガマティ調査住居では、神々はドゥクゥ・コタと呼称される部屋に祀られている。また仏教を信仰するブンガマティのジャート、シャキヤの住まいでは、最上階のブトゥに神仏を祀る場アゴンディオが設けられている。

キルティプール調査住居でも、半数（12戸のうち6戸、表4の1, 2, 5, 7, 9, 11）の住まいではドゥクウ・コタあるいはプザ・コタと呼称される部屋に神々は祀られる。これらの部屋には、一家の財産が置かれていて、通常は、同居する家族からみて下位のジャートの人びとは入ることはできない（少数だが、ドゥクウ・コタやプザ・コタには、同居する家族だけしか入れない例がある）。キルティプール調査住居の一部には、ドゥクウ・コタが無かったり、ドゥクウ・コタを就寝の場に転換したりして、神を祀る部屋をもたない住まいが存在する（表4の住居3, 8, 10）。またドゥクウ・コタという呼称だけが残る住まいもある。このような住まいでは神々は最上階のバイガアに祀られる。

キルティプール調査住居では、就寝の場となる部屋コタやバイガアの他に設けられる炊事調理の場に、神々の像の印刷物が貼られている。これらの像の一部は、生活集団ごとの信仰の対象である。

(c) 主婦は、毎日、水をバイガアに汲み上げた後に、ドゥクウ・コタあるいはバイガアに祀る神々の顔に水をかけて洗うクワシキグをして祈る。また、その後に近隣の神々を回って祈る。これはネワール族に保たれ伝えられてきた行動であり、キルティプール調査住居に継承されている。しかしながら、神々をほとんど祀っていない住まいの主婦は、近隣の神々に祈るだけである。

5-2 月経における浄と不浄の観念に関係する空間概念およびその展開

ネワール族は月経になると、身体が4日間汚れて不浄な浄性のレベル、ティーモジュになるという観念をもつ。月経になった女性は、①宗教的行為をおこなうブトゥの領域、②神々を祀るドゥクウ・コタ、プザ・コタおよびバイガアの神々を祀る場の周辺に入ることにはできない。これらの禁忌を破って、月経の女性が住まいの神礼拝をおこなうドゥクウ・コタなどの場に侵入すると、場の浄性は不浄な状態になり、シューチヤ・ソを塗り籠める浄化の儀礼をおこなって清めなければならないことになる。また、炊事調理・食事をおこなうブトゥの領域およびバイガアが汚れて不浄な状態になると、バイガアの床とブトゥは、シューチヤ・ソを塗って清め、浄な状態に戻さなければならないことになる。さらに鍋などの調理器具を洗い、水瓶の水は汲み直さなければならない。

住まいは、月経になったものにとって、侵入を拒む領域と不浄な浄性のレベルの者の存在を許す領域とに分けて認識される^(注13)。

このような月経の汚れの観念をもとにする人びとの行動と空間認識のしかたは、これまでにネワール族に継承されてきたものであり、キルティプール調査住居でも概括的には違っていない。

キルティプール調査住居の最上階バイガアで、人びとは、竈ブトゥに留まらずガスコンロなどの置かれる場を含めた領域をブトゥの領域と認識しており、月経で不浄な浄性のレベルになった者のブトゥの領域への侵入は、前述するティボの汚れの場合よりも厳しく制限されている。床面から高い位置に置いたガスコンロなどを使う住まい（前出、図5の住居5, 9, 10, 11）では、ブトゥの領域に月経の女性が入っただけで、バイガアの全体が不浄な状態になるとされる。いっぽう、チョト、マトア、チェリにもうけられる炊事調理の場では、月経の汚れはバイガアほどには厳密に意識されておらず、月経で汚れた者が炉の前に立つ程度では汚れたことにはならないが、炉に触れると汚れるという観念をもつ。

表4 住まいに祀られる神々の位置と住まいで神々に祈る場

調査住居	ジャート	型	バイガア		チョト		マトア		チェリ	
			バイガア	プザ・コタ ドゥクウ・コタ	チョト	コタ	ドゥクウ・コタ	マトア	コタ	ドゥクウ・コタ
1	マ	型A		-	㊦		-		㊦	㊦
2	タ	型A		-			㊦	-	-	-
3	タ	型B	㊦	-		-	-		㊦*	-
4	フ	型C	㊦	-		㊦	-		㊦	
5	マ	型A	㊦	㊦	㊦		-			㊦
6	フ	型C	㊦	-		-	-		㊦	㊦
7	マ	型A		㊦	㊦		-			-
8	コ	型D	㊦	㊦	-	-	-			-
9	マ	型A		-		-	-			㊦
10	マ	型B		-		-	㊦	*	-	-
11	マ	型A		-	㊦	-	-			㊦
12	マ	型A		-		-	-		㊦	

ブ：ブラダン マ：マハルジャン タ：タンドゥカール コ：コバリ
 型A：ドゥクウ・コタに神々を祀る
 型B：ドゥクウ・コタを就寝の場としてのコタに改築 →㊦はバイガアに祀る（NO.10では祀るところなし）
 型C：ドゥクウ・コタの呼称のみ残る一家の財産をおく倉庫になっている →㊦はバイガアに祀る
 型D：もともとドゥクウ・コタなし →㊦はバイガアに祀る
 各欄の - は該当する部屋が無いことをしめす
 * もとはドゥクウ・コタであった部屋を、就寝の場としてのコタに改築した
 ㊦：神々が祀られている場
 ㊦：印刷された神々の像が貼られている場

月経の汚れの観念をもとにする人びとの行動のしかたは、キルティプール調査住居に概括的には継承して保たれている。

6 本稿で得られた結果

本稿では、前稿に続いて、ネワール族の住まいおよび住生活の継承とその展開をとりあげ、空間的な秩序が展開する傾向を説明しようとした。事例的に調査した、キルティプールの中心部ラクおよびその周辺地区のネワール族の住まいの共時的な比較と、カトマンドゥ盆地周辺部の集落コカナおよびブンガマティでおこなった既調査との比較をもとにして得られた結果は、次のようである。

(a) これまでにネワール族に保たれてきた、バイガア、チョト、マトア、チェリの4層に階が重なる住まいの空間的構成と住生活における人びとの行動のしかたは、概括的には継承されている。しかしながら、保たれてきた空間的構成とは不連続に、居住面を拡大する更新は徐々に進んでいる。

(b) 多世代にわたって多人数が同居するネワール族の居住形態は、世代間を分ける就寝時の生活領域が生活集団ごとに形成される。この居住形態は、キルティプール調査住居に継承されている。しかしながら、同居する家族の世代間で、就寝に加えて、炊事調理および食事の場を分ける生活領域を形成する展開は、徐々に進んでいる。

(c) 前稿でしめした、ネワール族の住まいは、内側ドゥネと外側ビィネという二元的に対立する観念をもとにする空間概念を枠組みにして、つくりだされている、という筆者らの仮説は、キルティプール調査住居で事例的に検証することができる。

多くのジャートが混住するキルティプール中心部のラクおよびその周辺地区で、人びとのジャートの存在に関する浄と不浄の観念をもとにする行動は、内側ドゥネと外側ビィネを分ける観念に結びついて、住まいを幾重にも分ける空間認識を生み出している。

(d) 浄と不浄の観念にもとづく宗教的行為としての炊事調理をおこなう場面での人びとの行動は、キルティプール調査住居でも概括的には違っていない。また、下位のジャートから炊事調理の場を隔離する観念は継承して保たれている。しかし、炊事調理する者以外の家族のブトゥの領域への侵入を許すなど、継承されてきたものに

比べると、一部に違いが認められる。

(e) 食事を始めて唾液のついた不浄な浄性のレベルになった者の竈ブトゥの領域への侵入を禁忌とする観念は、キルティプール調査住居に保たれている。しかしながら、あらたな熱源の炉の導入は、ブトゥの領域を拡大する空間認識の展開に結びついており、パイガアの他にもうけられる炊事調理の場では、炉の領域の認識は弱くなり、宗教的行為における浄と不浄の観念をもとにする行動は、あらたな生活手段の導入と関係して、変わってきている。

また宗教的行為としての食事での行動は、①先祖と共食するボウビーグは、パイガアで変わらずおこなわれ、②神々と共食するデュオツァエグは、パイガアおよびパイガアの他にもうけられる食事の場でおこなわれる、など連続して保たれている。

(f) ネワール族に受け継がれてきた、月経の汚れの観念をもとにする人びとの行動と空間認識は、キルティプール調査住居でも概括的には違っていない。しかしながら、パイガアの他に設けられる炊事調理の場では、月経の汚れは最上階のパイガアほどには厳密なものとして認識されていない。

以上のように、キルティプールのネワール族の住まいをつくりだす空間的な秩序は、下位のジャートの存在、住まいでおこなわれる食事・炊事調理および住まいの神礼拝などの宗教的行為、月経に係る浄と不浄の観念をもとにする人びとの行動と空間認識に現れている。そこから読み取れる空間概念は、これまでに継承され保たれてきたものと、おおきく違ってはいない。しかしながら、キルティプール調査住居に現れている萌芽的な変化は、今後のネワール族の住まいと住生活の展開の推測につながるものと考えられる。

キルティプール調査住居に現われている住まいの空間構成の展開は、ネワール族に継承されてきた次世代への財産分与の過程の一面の現われ、と筆者らは推測している。また、この展開は、家族を単位とする生活集団による暮らしが、夫婦を単位とするものへと展開する現象とも理解できる。この現象の意味の追究は、今後に残る課題である。

本稿で見いだした浄と不浄の観念をもとにするネワール族の住まいの空間的な構成をつくりだす枠組みの継承と展開の傾向は、調査上の制約があり、少数事例の比較から得たものである。また、ジャートの間を比較する段階には未だ達していない。

謝辞

本研究は科学研究費補助金（特別研究員奨励費（18・1507））の助成を受けたものである。

参考文献

- 1) ラトナ・ケサリ・ブラジャパティ、谷内麻里子、塩谷壽翁：ネワール族の住まいにおける人びとの行動と空間認識から見いだされる空間概念—ネパール・カトマンドゥ盆地のコカナとブンガマティの場合—、日本建築学会計画系論文集 第73巻627号、pp.939-946、2008.5
- 2) ラトナ・ケサリ・ブラジャパティ、谷内麻里子、塩谷壽翁：ネワール族の儀礼および祝祭行事における人びとの行動から見いだされる住まいをつくりだす空間概念—ネパール・カトマンドゥ盆地のコカナとブンガマティの場合—、日本建築学会計画系論文集 第73巻第631号、pp.1861-1868、2008.9
- 3) 谷内麻里子、塩谷壽翁：ダイ・ルー族の住まいにおける空間認識と行動から見いだされる空間概念—シップソーンバンナー（西双版纳）

のバーン・ロン（曼龍）の場合、日本建築学会計画系論文集 第568号、pp.9-16、2003.6 など。

注

- 注1) チベット・ビルマ語系の民族のひとつでネワール語を話す。カトマンドゥ盆地に小文明を築いてきた先住民族。
- 注2) ネワール語では、汚れていない清浄な状態、つまり浄（pure）な状態はチョコ（chokho）、これに対して、汚れている状態、つまり不浄（impure）な状態はチョコ・モズー（chokho-maju）という。チョコとは清められた状態、チョコ・モズーはチョコになっていない清められていない状態のことである。
- 注3) 宗教的行為とは、具体的には、日常におこなう住まいの神礼拝、神社での神礼拝、年中におこなわれるさまざまな祝祭行事および通過儀礼における祭式、食事、食物を配膳する行為をふくむ炊事調理などである。
- 注4) 住まいの平面的な構成、住生活財・生活装置、日常生活および非日常生活における行動のしかた、住まいの各部の呼び名、空間の認識のしかたをあらわす語彙、などを実測、観察、聞き取りにより調査。調査は、塩谷壽翁、谷内麻里子ほかが共同しておこなっている。ネワール語の発音と意味は、ネワール語—日本語の通訳を介して、複数のインフォーマントに反復して聞き取り、可能な限り正確を期すようにつとめた。
- 注5) マハルジャンの住まい：7戸、タンドゥカールの住まい：2戸、ブラダンの住まい：2戸、コバリの住まい：1戸を調査した。
- 注6) バンシ・ラル・マハルジャン、クリシュナ・クマリ・マハルジャン、ブラル・コバリ、ディル・マヤ・コバリ、アムリトマン・シュレストタ、ナニ・ベリ・シュレストタ、ビン・バハドル・タンドカール、チョメリ・タンドカール
- 注7) 筆者らは、2003年8月から9月にかけて、カトマンドゥ盆地南部、コカナのネワール族の住まいを調査している。また2004年8月から9月にかけて、同、ブンガマティのネワール族の住まいを調査している。コカナは、ルッドラニを祀る寺で知られていて、おもにジャブと呼ばれる農民のジャートが住む。またブンガマティは、カルナマエを祀る寺があることで知られていて、おもにシャキヤ（金銀の細工をするジャート）およびツラダ（商人のジャート）が住む。
- 注8) 日常的な行動（就寝、休息およびくつろぎ、外来者の応対、炊事調理など）がおこなわれる住まいの床面。
- 注9) 農業は第一世代が自家消費用に、米、麦、玉蜀黍などを栽培している。第二世代は、教師、手工芸職人、大工、トラックの運転手などの農外の仕事につくものが多い。
- 注10) ネワール族の家族では、結婚した息子夫婦は、当面は親と同居する。また娘は結婚すると家をでる。したがってネワール族の家族は、三世代にわたる家族では、第一世代の夫婦、第二世代の夫婦およびその子供（第三世代）、未婚の第二世代の男子および女子から成る複合家族である。キルティプール調査住居に居住する家族の平均人数は8人を超えている。また三世代にわたる家族は12戸のうち9戸（75.0%）と多く、二世代にわたる家族は少数にとどまっている。
- 注11) 歴史的に形成されてきたネパールのカースト制度のもとで最下層に存在するいわゆる不可触カーストとして扱いを受けてきた人びと（ネパール語ではachhut、pani nachalne）を先祖に持つ人びと。現在は、憲法のもとでの平等は定められているが、カーストの上下の階層性や不可触の習慣は社会的に根強くつづいている。
- 注12) 同居する家族のうち、家事の中心となる女性。
- 注13) 住まいの内部は、①浄な浄性のレベルにある者が宗教的行為をおこなう竈ブトゥとその周辺の領域および住まいの神々を祀るドゥクク・コタの領域と、②それ以外の領域とに分けて認識される。前者は、不浄な浄性のレベルの者あるいは浄化の儀礼をおこなっていない中間の浄性のレベルにある者の侵入を拒む領域である。後者は、中間の浄性のレベルにある者が存在する領域であり、月経、人の出産、人の死の汚れで不浄な浄性のレベルになった者が存在する領域

（2008年8月26日原稿受理、2009年1月14日採用決定）